

(一財)北海道開発協会では、平成14年度から非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して助成を行ってきており、17年間で125件になります。これらの活動をより効果的に広報しサポートするために、平成20年度から助成を受けた団体が活動成果等を発表、参加者同志が地域づくりについて自由に意見交換する「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。第10回となる今年度は、平成29年度に助成を受けた団体を対象として、平成30年11月9日に札幌市内で開催しました。

クローズアップ①

第10回北海道開発協会助成活動発表会・懇談会

各地で展開する地域活性化活動をサポート

(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所

日本の近代化に与えたコンクリート技術の歴史

活動名：函館湾岸コンクリート物語2017

函館湾岸価値創造プロジェクトチーム 布村 重樹 氏

函館は、幕末の開港によって、多くの外国船の来航とともに異国の技術が入り、その一つにコンクリート技術があります。また、土木産業遺産も多く、私たちは土木構造物や建築構造物を観光資源としての価値を創造しようと日々活動を行い、“日本の近代化は函館から”をキャッチフレーズに、特にコンクリートの聖地としたい思いがあります。



その理由には、明治29～32年の函館湾改良工事によって、コンクリートの品質管理技術が確立され、品質の良いコンクリートが世の中に普及するきっかけになったと考えられるからです。原料とするセメントも太平洋セメント上磯工場（当時は北海道セメント）で採掘され、明治末期には日本最大規模のセメント生産量を誇り、近年は工場夜景の観光スポットになっています。

コンクリート構造物は地味で、地元の方も価値が分からず通り過ぎるものをどのように価値や面白さを観光資源として、アピールできるのか。そこでフォトコンテストや、まち歩きコンクリートツアーを開催しました。

フォトコンテストには86通が応募。14作品を表彰し、道南いさりび鉄道「ながまれ号」の車内で、受賞作品

の展示を行いました。また、フォトコンテストの応募写真を使ったコンクリート物語カード全13種類を制作。地域交流まちづくりセンターで、毎月1種類100枚を配布。カードは好評につき2、3日でなくなりました。アンケート結果でも、「非常に満足」、「満足」の回答が殆どで、女性を含めた若い人に面白がっていただき、「普段何気なく通り過ぎていたところも、説明を受けると100倍楽しくなる」などの意見も寄せられました。

今年9月、函館で開催された開港まちづくり景観会議で実施したコンクリートを作る体験ツアーは、非常に好評で、恒常的な仕組みづくりにすべく話し合っています。今後、ITを利用したVR（仮想現実）やAR（拡張現実）を活用しながら、持続的に稼ぐ仕組みをうまく考えながら継続できるかたちを作りたいと思っています。

魅力ある体験型観光で平均滞在2時間からの脱却

活動名：余市の地域資源を活かした体験型観光の開発
～ワインと羊を巡る冒険～

NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト 志村 光菜子 氏



私たちの団体は、持続可能な暮らしと社会の推進を目的に平成21年、長沼町でエコビレッジライフ体験塾として設立。平成24年に余市町へ拠点を移し、農地2ha、山地1ha、雑種地3haの敷地に平

成26年、研修棟を建て様々なセミナーを行い、生産者と消費者、都市と農山村をつないだ地域の活性化に貢献したいと思っています。

平成26年秋、NHKの朝ドラ「マッサン」が放送され、余市町への観光客は80万人から159万人に増加。しかしニッカウキスキーを訪れ、平均滞在2時間で町を後にします。そこで町の魅力が伝わる観光コンテンツが必要と考えました。余市町は、道内初のワイン特区として平成23年内閣総理大臣の認定を受け、最低製造数量の規制緩和により、小さい規模からワイン製造が可能になったことで、新規就農やワイナリーが増加。そこでワインと相性の良いラム肉にも需要があるとみて、羊を導入した循環型農業や耕作放棄地の管理によって、持続可能な地域を達成できると考えました。

今回の活動では、体験型ツーリズムとして、羊を5月に導入し、羊の毛刈りやワイン葡萄の栽培体験、12月には自分が育てた羊とワインが味わえる試食会を実施。試食会では、町で取れた食材、エコビレッジで育てたラム肉とワインをコースランチとして提供し大変好評でした。

平成30年、クラフトワイン造り体験と羊飼いオーナーをパッケージ化し、1口1万円でオーナーを募集。定員20名に対し、26口のファンが集まり、購入した2頭の羊から約40kgのラム肉をとることができました。クラフトワイン造り体験では、ワイン葡萄の苗を新植から収穫・醸造体験まで、年4回の講座に延べ35名が参加。今年、440kgの葡萄を収穫し、ハーフボトル(375ml)で約340本、残った葡萄は500mlのジュース200本を作る予定です。活動を通じ団体としてステップアップさせる体験が展開できました。

産官学の連携強化による地域資源の再発掘

活動名：地元食材を活用したハーブティの開発と新しい観光ブランディング

なにいろ工房 黒井 理恵 氏

なにいろ工房では、名寄にある農産物から商品を作るだけでなく、いろんなソフトのいいところを掛け合わせた商材開発を考え活動しました。



名寄市は、ヘルスケアに関わる名寄大学や農家、薬用植物研究を行う薬用植物資源研究センターがあります。食とヘルスケア薬草とのつながりを持つ人たちを活かした産官学の連携強化や、近隣地域の飲食店も連携した商材を開発し、観光客も含め、地域の人に愛されるハーブティ開発を目指します。

道北は、観光ブランディングが作りにくいと言われる地域ですが、名寄市の観光ブランディングの可能性は、美と健康、病院などの施設もあるため、近年注目されるヘルス型観光ツアーのきっかけとしても注目しています。

構想では、薬用植物研究センターや名寄大学、もしくは道の駅や地元農家の方々が生産に関わり、なにいろ工房が販売を行うこと、地域の観光協会は、美と健康ツーリズムの開発すること、近隣の下川町のエコツアーや、地元ヨガ、エステサロンとの連携をはじめ、私のような素人が関わることで、いろんな人を巻き込んだ商材開発が出来ると考えています。

資源発掘、プロトタイプ、マーケティング、仕組み化を目指し、試飲会や試験販売を平成29年度に行いました。実施には、全国で野草茶をテーマに商品開発を行う新田理恵さんに名寄の野草を見ていただきました。薬用植物研究センターへの見学や、名寄市北国博物館には、アイヌの方がどのように飲み物を飲んでいったのか、また乾燥機を持つ近隣農家では、栽培の可能性をヒアリングしました。

試飲会で、美味しいと評価されたハマナスには名寄のイメージがなく、また原料の採集、栽培化の仕組みやブランドづくりへのハードルも高く、商品販売への課題が見えました。

名寄大学には、地域の障がい者雇用企業との連携のお話を頂いたり、小さくスタートする場合、乾燥機が必要になるなど、農家、企業の選定、風味の開発と他の地域資源を再度発掘する必要性など、今後の課題が浮かびあがってきました。

生産空間を通じた治癒力で社会問題解決へ

活動名：「里山（生産空間）の価値化創造」のための活動事業

NPO法人しもかわ森林未来研究所 春日 隆司 氏

現代社会では、メンタル不調者が多く6割弱の事業所が企業問題として抱えています。この問題を生産空間と動物を加えた治癒力によって、新たな需要として作り出せないかを実証する取り組みを行っています。



企業の健康経営では、メンタル的問題によって一人当たりの生産性が低下し、メンタルヘルスの休職者増加によって、時間差で会社の収益が落ち、また社会保障費が上がるなど、メンタルヘルスの問題は、経済にも大きく影響します。

生産空間と生態系を活かしたプログラムには今回、馬を活用します。馬の乗馬リズムは、紀元前より健康によいと言われ、諸外国ではホースセラピーがドイツの国民健康保険、またアメリカの民間保険会社の保険に適用されています。

昨年9月、馬に手も触れずに興味を持たせるプログラムを行いました。手を叩いたり、草をあげたり、コミュニケーション能力のボールを毎日投げ、初めは興味を示さずボールを返しません、ある機会に反応し、投げ返す様になります。こうしたプログラムは、経営者のプログラムに非常に有効とされ、外資系企業では、3泊4日で60万～100万円近いプログラム料を取るようです。外資系の経営者は、金額面よりコミュニケーション能力の高まりが、企業の生産性向上につながっていくという考えです。

生態系の中で人が学び、その治癒力を持って社会問題を解決する。生産空間の価値化は、今日的課題とされる働き方や農村の活性化、地域資源の活用、若者の活躍など、社会の変化によって新たな仕事を作り出し、社会保障費の削減、そして地方では、仕事や地域が活性化する。健康になることで会社の生産性が伸び、または経費負担が削減される。その部分を価値化し、投資資金に充てていく。それがソーシャルインパクトボ

ンド（社会的な課題の解決に当てる債券）として基盤を整備しながら、企業や自治体が行うグリーンボンドの投資を得て、ビジネスを成立するための仕組みを北海道で作り上げていければと思っています。

空間をいかに価値化し、使っていくのかが極めて重要です。是非、連携しながら私どもの取り組みが有効に活用できるように、次の北海道につながればと思います。

撤去予定のダム情報施設を観光づくりの拠点に

活動名：夕張シューパロダム周辺の観光化に資する拠点づくりと各種活動

NPO法人ゆうばり観光協会 多喜 雄基 氏



夕張市の観光協会は、市の破綻後、観光課はなくなり民間主体の「夕張ボランティアの会」が母体となり、ゆうばり観光協会が発足。当初は夕張市の補助金もなく、堀元知事らの夕張応援隊による支援

によって、イベントを継続する足掛かりとしました。活動拠点もなく民家で細々とつなぐ観光協会でしたが、「ゆうばり寒太郎まつり」の自主開催や、観光ガイド（有料）、オリジナル観光商品開発と販売、また昨年まで「北の零年」映画ロケセットの指定管理を行っていました。

夕張シューパロダム建設で使用したダムインフォメーションセンターには、約50台分の駐車スペースや、身障者用トイレ、チャイルドシート・ベビーチェアが付属。同施設はダム完成後に撤去される噂を聞き、観光協会でも利用可能か夕張市に問い合わせ、5月～10月の間、施設を貸していただけることになりました。施設内では、観光案内、物販、ダム写真展示やダム情報の提供を行います。「あったカフェR452」は3年前から運営し、シューパロダムカレーやメロンジュースの販売、また地域農産物の直売を行っています。

今回の活動では、夕張観光を周知するため、パンフレット3,000部を作成。近年、中国系企業の進出や中国人観光客の増加が見られることから英語と中国語を併記しました。

夕張市の南部地区や大夕張地区は、富良野芦別道立自然公園に指定。しかし夕張市の中では日の当たらない地域です。全国2番目の貯水面積を有する夕張シューパロダムも平成27年3月に竣工し、ダム湖ではボートやカヌー遊びの利用者が増えました。利用にはダム管理所への届け出が必要ですが、常時受付はしていません。そこで施設での活動期間に限り、その受付対応をとという話も頂いています。今後の活動として「あったカフェR452」の運営と、こうした地元でのスポーツも含めて行っていく予定です。

NPOからの再出発。啓発活動で川をもっと身近に

活動名：流域住民の夢をつなぐ かわたび！

NPO法人まち・川づくりサポートセンター 森井 智江 氏

平成15年、石狩川流域の河川環境を活かした活力ある地域づくりを目的に行政が主導し「まちづくり・川づくり協議会」を発足。協議会では住民が主体となり「環境保全活動、美化活動、水難・水防活動、水辺のイベント、子どもの水辺活動」に関する活動を行いながら将来的には組織の自立を目標に掲げていました。



活動を継続する中で生じた課題を整理した結果、水辺のイベントは、実行委員会形式として協議会から独立し、衰退していた「子どもの水辺活動」は、川に学ぶ教育の視点が欠け、その反省に立ち、新たに「みんなとち自然体験楽校」として立ち上げ、その他の活動は市民に定着していることから継続を模索しました。

協議会は一度解散し、平成23年11月「教育、環境、持続可能な社会、安全・防災」を目標にNPOとして再出発しましたが、思うようには進みません。要因として川遊びの経験がない大人はその子供も川に近づくことを躊躇します。親や大人への啓発が必要でした。

石狩川や滝川市の地域特性を活かした自然体験は、市内外に誇れるオンリーワンの体験と考え、石狩川を活かした体験活動「もっと川ろう！」をテーマに、世代や年齢を超えた人々との交流や感動を共有できる体

験活動を企画したいと考えました。

当団体では、10人乗りEボート3艇を所有し、川下りのノウハウ・実績・安全管理の経験・指導者の充実などの強みを活かして、川下りを地域住民や道内外に広く普及するという目標を立てました。

当初は、安全面に難色を示されましたが、今では小学生や高校生も対象に活動を行い、参加者の笑顔によって、やりがいと使命感を感じています。安全面に対しても参加者の口コミ等で徐々に理解は深まっていますが、自然の中での活動は、安全を最優先する慎重な判断が求められます。今年7月に計画した6回の活動も降雨による増水で実施はわずか1回でした。今後、川下りの中止に伴う代替プログラムを考える必要を痛感しています。

また、活動を継続する上では指導者の養成が欠かせません。近年、人手不足を補うため地元の大学生に協力を頂いていますが、こうした活動を通じて、住民それぞれが川とどう付き合うとよいのか、もっと川を身近に考えるきっかけになればと思っています。

若手農家団体のサポートで湿原再生を加速

活動名：「ほろむい七草・ミズゴケ再生保全活動」

NPO法人ふらっと南幌 橋本 壮吉 氏



ふらっと南幌は、開拓時代の幌向駅通や幌向運河という町の財産をPRすることから活動が始まり、現在ではフットパスを取り入れ町の歴史・文化に触れる活動をしています。

南幌町は、昭和37年の町制施行と合わせて、幌向村から改称されました。この「幌向」という名を冠する「幌向原野」という湿原地帯がかつては広がり、明治期104km²あった夕張川流域の湿原面積は、今では0.1km²まで減少しています。そのため、ここが湿原だったことを知らない町民も大勢います。この現状を受け、夕張川流域の湿性植物の再生事業を国の事業として実施。湿原再生には「ほろむい七草」と呼ばれたホロムイの和名をもつ湿性植物7種を復活させるプロジェク

トも進んでいます。

この湿原再生の土台にはミズゴケが重要です。私たちが管理する幌向原野再生用地は、昭和46年に、南幌町が湿地保全のために買い取ったものを、現在、維持管理を条件に活動フィールドとして借り受けたものです。エリア内では、再生用地の草刈り後、ミズゴケを移殖して定着状況を観察しています。私たちには、専門的作業機器もなく、またメンバーの高齢化で実働的制限があるため、町内の若手農家団体「農猿」にサポートを要請。また専門家のアドバイスによって、生い茂った木を一度伐採。肥料を含んだ農地からの水の浸入や、雨水が縁から抜けないよう、伐採木で堰を設置します。湿原再生の歴史を含め農家に対して知っていただくなかで、ミズゴケ栽培を農業的にできないかというアイデアが出るなど、今後の進め方について「農猿」と話し合っています。

農閑期の冬場に雑木を伐採し、雪解けから堰づくりを行う予定でしたが、天候不順等で未完成です。国が実施する夕張川湿原再生地と、私たちの幌向原野再生用地を結ぶコースでの湿原めぐりフットパスを年1回開催し活動への理解を深めています。町の団体に協力を得ることで、活動の認知や町の人との協力体制を作れたことが財産となりました。今後、未完の堰を完成させ、引き続き湿原再生事業を町内外へ発信し、認知されることが課題です。この活動を毎年更新しながら、幌向原野再生用地を有効利用していきたいと思えます。

体験型観光で広がる連続性プログラムの可能性

活動名：エコ発想と国内外交流による地域ブランド商品の開発

NPO法人八剣山エコケーターリング ビアンカ フュルスト 氏

私たちは果樹園のフィールドを持ち、環境教育・持続可能な社会、特にエネルギーや自然素材の分野で長年活動する団体です。活動ではドイツの環境教育を実践し、エネルギー教育やエコクラフト作り体験など、果樹園の運営を通じた健康と環境・食をテーマに結び付け、ドライフルーツづくりをはじめ、国内



外関係なく交流をもつ体験型観光をキーワードに活動を行ってきました。

特徴は、太陽熱を利用したエネルギー教育でソーラークッカー、ソーラーオーブン、ソーラードライと呼ばれるツールを利用します。このツールによって、ジュースやジャムの他、ドライフルーツ、ピクルスの加工品。ソース、スープを瓶詰した保存食などを作ります。

農産物を加工品とするワークショップ形式の団体向けプログラムは、衛生面を守りながら進める際、40人の対応は時間もかかり難しく、理想的には20人でした。ワークショップでは、ジャムやドライフルーツ作りだけでなく、非常食をテーマに災害と健康・エネルギーを結び付け、サバイバルキャンプでは、テントの立て方や手作りの非常食作りを紹介。そして太陽熱を利用したツールでは、再生可能エネルギーを意識させ、将来の省エネにつながる入口となります。さらに、体験をドイツ語や英語で対応することで、外国語のスキルアップ講座としても使えます。

また企業の社員研修やチームビルディングをキーワードに、普段デスクワークで働く人に違った体験をさせることで、コミュニケーションと笑いが出てきます。チームビルディングは札幌市と連携し行っていますが、そこにもニーズがあると思います。この他、インバウンドや障がいを持つ方との団体とタイアップなど、特別なニーズを持つ人を加工品作りに取り込むことで、別のフィールドになると思います。

今回の活動では、加工品作りを入り口とした体験型観光によって、多様な可能性が見えています。その一つに加工品を活かす連続性プログラムとして、夏に加工品を作り、冬に食することで、保存効果が見え、より深い教育へとつながっていきます。こうしたテーマごとの体験型ツーリズム、そして冬季の活動として沢山の可能性が見えました。

